

私の戦争の記憶

中郡支部 渡辺 キヨ（子）

戦没者 渡辺 梅吉

戦没地 中国・廬山

私が父の戦死の知らせを聞いたのは、小学校一年生の二学期の教室でした。昭和十三年九月三日、担任の先生から「渡辺さんのお父さんが名誉の戦死をされました。」と伝えられ「何かお手伝いすることもあるから家に帰りなさい。」と言われ家路を急ぎました。家に着くと、親戚をはじめ近所の方がいっぱいでした。告別式は町葬で多くの参列者があり、婦人会をはじめ各種団体の皆様にお世話になったそうです。

父が出征中、母は幼い三人の子供（長女の私六歳、次女五歳、三女二歳）を抱え、中風で倒れて半身不随になった姑である祖母の看病しながら、家が農家の為、朝から晩まで田畑で働いておりました。長女である私も家の手伝いに追われました。私は祖母の寝ている部屋で絵を描いたり、折り紙を折って留守番をし、妹たちや祖母の面倒を見ておりました。そんな私を親戚も、近所の方も誉めてくださったものでした。

祖母というと思い出されるのは、祖母が元気な頃、坪の間（自分専用の一坪菜園のようなもの）

に色々な花を育てていた事です。水仙、おもと等さまざまな花を育てていました。その花々を生け、ほのかに匂う花の香りに幸せを感じている様子が幼い私にもよく分かりました。そんな祖母の花好きが私にも継がれ、苦しい時でも花を愛で、気持ち切り替えて生きてこられたように思います。祖母も昭和十三年三月に家族に見守られて亡くなりました。同じ年の九月に父の戦死ですから、幼い私たちにはわかりませんでした。母の苦労は相当なものだったと思います。

父の死後、母の生活は変わらず、家の農作業、さらに共同作業の田植えの為のセンギ堀の清掃など、男の方に混じって一生懸命に働いていました。母との思い出の中に、父が亡くなる前の夏休みに母の実家(中井町)に行った事があります。祖父が牛車で迎えに来てくれました。本当に親子四人、久しぶりの外出に心が踊った事を覚えています。子ども達は買ってもらったばかりの麦わら帽子をかぶり、母は嫁入り道具に持ってきた日傘をはじめておろし、牛車に揺られて行つたのです。湧き水で冷やしたスイカの味、山、川で遊んだこと、花を摘んだり、土手にござを敷いて滑って遊んだ事、子ども達にはこの楽しい思い出が、母にとっては懐かしい人達からの慰めが、その後の生活の心の支えになったと思います。

やがて私が八歳の年の二月頃から、母は体調をくずし、寝込むようになりました。そんな母の様子に子ども達は世話をかけまいと、自分の事は自分でやっていました。母の体調がよい時、母は私にカマドで御飯を炊く水加減、火加減、火の始末を教えてくださいました。かなり厳しかったと思います。「自分が亡くなったらおまえに頼むしかなないので、」と母は涙ぐんでいました。母の病

気は結核でした。寒川の病院に入院、母と離れて暮らすようになりました。「母のいない留守をしつかり守ります」と仏壇に手をあわせる私に、叔父叔母は「これから苦勞する事が沢山あると思うけれど、近くにいたので困った事が出来たらいつでも来なさい。」と言われ励みになりました。感染の心配があるため、母とは面会できませんでした。母の具合が悪くなった時、叔母に連れられ、窓ごしに母に会いに行きました。子ども達が来た事を知らせると泣きっぱなしになるので、身体によくないと母には内緒でした。母の顔色は蒼白で、一回り小さくなっていました。今でも脳裏に焼き付いています。昭和十七年十二月十四日、母は亡くなりました。

母と離れて暮らすようになってから、お手伝いの人や親戚の人に助けられ何とかやってきましたが、母とは違います。ずいぶんさみしく辛い思いをしました。戦争は戦地で戦う人、残された家族、すべての者に苦しみ、悲しみを生じさせます。残された者にとって悲しみをこらえ生きて行く事は、終わりなく続きます。いいえ戦いに行く者、家族を残していく者にとっても同じかもしれません。父が出征していく時、まわりの者に母を、妻を、子ども達を頼むと大きな身体を小さく折り曲げ頼んで行つたと、何人もの方から聞きました。二度と戦争がおこりませんように、世界が平和でありますように心から祈ります。